

亀田 誠治 (かめだ・せいじ) 先生

音楽プロデューサー

1964年、アメリカ、ニューヨーク生まれ。辰年。

1989年、音楽プロデューサー、ベースプレイヤーとして活動を始める。

これまでに椎名林檎、平井堅、スピッツをはじめ Do As Infinity、スガ シカオ、アンジェラ・アキ、JUJU、秦基博、チャットモンチー、エレファントカシマシ、WEAVER、植村花菜、ハナエ、MIYAVI VS KREVA など 数多くのアーティストのプロデュース、アレンジを手がける。

2004年夏から椎名林檎らと東京事変を結成。

2012年閏日に惜しまれつつも解散。

2007年、第49回日本レコード大賞、編曲賞を受賞。

2009年には自身初の主催イベント「亀の恩返し」を武道館にて開催した。



〈講義概要〉

音楽プロデューサーとして、数多くのアーティストのプロデュースやアレンジを手掛ける亀田誠治氏が、2004～2012年における音楽産業の変化と今後の可能性について講義を行った。

講義ではまず、音楽グループ「東京事変」のメンバーとして活動した8年間における音楽産業の変化や、アーティスト及び音楽関係者の仕事の取り組み方の変化について、プロデューサーの視点から裏話などを織り交ぜながら説明。2004年頃からCDの売上が低迷し、音楽ビジネスの軸が音楽配信、そしてライブへと変化した実態を示し、「東京事変」としてどのような対策を行い、音楽産業に影響を与えてきたのか言及した。音楽を人々に届けたいという熱い思いを根底に、時代の流れに対応して果敢に新たな挑戦を続けてこられた姿勢に学生は感銘を受けた。

さらに、音楽制作におけるデジタルネットの活用例や「ライブビューイング」の今後の可能性についても説明し、デジタル化をポジティブに捉えて可能性を追求し、挑戦していくことの大切さを示した。「少しの困難にも負けず、皆でアイデアを出し合って未来に向かってポジティブに、そしてクリエイティブな生活を送って欲しい」と学生にメッセージを残した。

〈受講生の感想〉

改めてデジタル文化によって大きくライフスタイルが変化したことを実感した。アーティストたちはこの状況に対応するために新たな売り出し方法を考え出して努力していることを知った。東京事変が時代の変化に合わせて作品の売り出し方を変えながらも自分達のスタイルを変えたり、イメージを崩さず音楽活動を続けてきたのがすごいことだと思った。時代や状況が変わってもやりぬく力が必要だと思った。

立命館大学・映像学部・3回生

CDが売れなくなっていることに対する音楽業界の変化やアーティスト側からのアプローチを知ることができて大変興味深かったです。「ものを作る現場では商業的な目的は一切考えない」という制作者としての考え方に感動しました。ライブの増加やライブビューイングなど、アーティストとリアルタイムで一体感を得られる場の発展は楽しみです、音楽業界を立て直す面でも大きな可能性を秘めていると思いました。

立命館大学・映像学部・3回生

情報伝達の多様な手段を上手く利用することで音楽の楽しみ方も多様になってとても音楽の可能性が大きくなってきていると思う。「クリエイティブに考えることで上手くいく、何か変えられる、よりよいものが出る」というお話しに納得しました。

立命館大学・産業社会学部・4回生

問題を問題と捉えるのではなく、変化として捉え、その変化に柔軟に対応する大切さを強く感じた。コンテンツというエンタテインメントを多くの人に届け続けるためには、常に新しいアイデアを考え続け、それを実行することが大事であるということを学んだので、自分の学習にも役立てていきたい。

立命館大学・映像学部・3回生

東京事変の歴史と音楽産業の歴史ということで非常に簡潔で理解しやすかったです。一番印象に残っているのが、PVとCMのタイアップの話です。普段の延長上で発信の仕方を変えることで新しいことを開拓していくということの方がファンやアーティスト自身、新しいファンにとってとてもいい効果を生み出すのだろうと感じました。

立命館大学・産業社会学部・4回生

音楽のデジタル化で音楽業界がどのように変わっていったのか、そして東京事変がどのような挑みをしてきたのか、すごく分かりやすく理解することができました。デジタル化によって違法ダウンロードが増え、CDが売れなくなったりとネガティブな側面ばかりでなく、その時代に適応したクリエイティブな発信の仕方があったりとポジティブなことをたくさん聞けて勉強になりました。

立命館大学・法学部・3回生

